

『市政に生きる』

前田賢次 著

市政人社 [刊]

1936年6月 314頁 図書番号 OA-0435

著者の前田賢次は東京市の職員であり、監査局、産業局、総務局、市民局などの局長を歴任した。在職中友人の強い勧めにより、雑誌「市政人」に日々の雑感を寄稿するようになった。本書は、これら寄稿に加えて新たな書き下ろしや講話の筆記を1冊にまとめたものである。

本書に集録されているのは、31編の随筆と2編の講義録である。講義録は、市区職員講習会と教育局事務講習会で行われた講義内容を筆記したもので、「市区職員の服務」と「事務能率の増進」がテーマとなっている。一方の随筆は、そのほとんどが10ページにも満たない短いもので、内容は様々だが日常の職務や市政について論じたものが多い。

本書は、著者自身が序文で「狭い日常生活に於いて感じたものを、同じく東京市政に生きる人達と共に、静かに語り合って反省の資としたい気持ちで筆を執った」と述べている通り、市の職員を読者対象として書かれたものである。

当時の東京市は、市会議員や市職員の関与した疑獄が相次いだことで「東京市政といふものは腐敗亂脈の標本であるやうな考へは世人の一種の迷信とまでなつてゐるかの如く思はれる。それ程に東京市の信用といふものは世間に失はれてゐる」と著者が嘆くほど、評判が悪かった。

本書巻頭に掲載された「新市吏員道の提唱」という書き下ろしはまさに全職員に向けたものである。著者は、自分達の仕事の重要性和責任を自覚することで「東京市の職員たることを誇りとしやう」と奮起を促し、同時に「私達は決して自分を卑めてはならない」と批判に萎縮して卑屈にならないよう戒めている。そして、市政改善のため職員が実践すべき事柄として、「帝國の首都たり世界的大都市たる東京市に奉職するの矜持を失はざるべし」「市務の明朗を期す」「執務に進歩的たるべし」「専ら上下相信頼すべし」「公に奉ずるに後顧の憂なからしむるため私生活の健全を期す」の5つを挙げている。

こうした職員倫理に関するもの以外では、特に人事行政への言及が目立つ。年功増俸による給与制度をより合理的なものに改善すべきとした「給料の話」、職務に適した人材を登用するため職階と職種の詳細な細分化を提言する「適所と適材」など、度々主題として取り上げている。また「市吏員銓衡の方法について」と題する一文では「人事に於て最も重要なものは採用である」として、選考方法や採用基準についての私見を述べている。著者によれば、市吏員として採用すべきは「一面或る特長を持つと共に、他面市吏員として絶対に必要と認むべき程度の常識を備へたる人物」であり、「銓衡は知能、健康、信用の三方面に亘る觀察に依つて行ふべき」としている。その銓衡方法については「推薦、書面考査、筆記考査、面接考査、實地考査、健康診断」を挙げて、これらを「順序に依つて行ふを可と思ふ」と述べている（ちなみに東京市では、昭和7（1932）年にそれまでの縁故採用が廃止され、試験による銓衡制度が導入された）。

本書が執筆されたのは70年以上も昔であるが、職員のモラル向上の必要性は今日にも通じる。昭和初期の東京市政の内情を知ることのできる1冊である。

（井上学・市政専門図書館司書）